ふるさとわがまちづくり

大畑自治区

◆「大畑」の由来

大畑町は市の西部に位置し、瀬戸市に近い戸数60戸あまりのまちです。とりたてていうほどの変化もない、ごく普通の静かなまちといえましょう。最近目につくことは、まちの中央を愛知環状鉄道の高架が走り、コンクリートのざらついた白い肌がむき出しになっていることぐらいです。大畑町の歴史は古く、隣接の八草町と同様古墳の多い土地です。すでに発掘調査された大原古墳を始め、御墓と地元の人が呼ぶ小山にはかなりの古墳があるといいます。まちの歴史家は、「小さな集落の割には古墳の多い所で早くから人が住み、それもかなり有力な人じゃないかと思います。中央の墓を囲むように5から6基の小古墳が位置しています。おじいさんの代には国道155号線の敷石に古墳の石を並べたということを聞きますから、かなりのものだったと推定できます」といいます。

明治39年（1906年）に保見村が誕生するまでは橋見村大畑といい、15軒の戸数でした。現在の駐在所は当時、篠原のお宮付近にあったものを、小学校のできた村の中心地、大畑へ移したそうです。小学校ができる前は篠原と加納に寺子屋があり、大畑でも勉強をしたい子供は広幡を経由して手掘りのトンネルを通り、山越えをして加納の寺子屋へ勉強に行ったそうです。

またこの地区では特に鉱業が昔から盛んです。大正末期から昭和初期はサバ土の全盛期で、まちの産業として大いに栄えたといいます。この時は、「藤岡、猿投と並ぶ良質のサバ土の産地で、瀬戸の陶土によく売れました。大畑、八草には馬や牛が40頭ほどいて、瀬戸まで1日につき馬は2回、牛は1回半と荷を運び、朝はいつも道に馬車が連なったものです」と聞きます。このサバ土も陶器の土の利用法の変化で需要が減り、掘らなくなり、馬や牛もトラック輸送にとって変わり、姿を消しました。

しかし、ガラスの原料の珪砂や窯業の耐火原料の木節粘土がこれにとって変わり、引き続き鉱業は栄え、現在まで続いています。まちの30歳代以上の人は、何らかの形でこの産業に携わって生活をしています。現在は、昔ほどの人手は要りませんが、まちの重要な産業であることに変わりありません。

大畑町にも昔からの伝統行事はかなりありましたが、時代の波とともに消えつつあります。しかし、嬉しい話題もあります。昭和53年の白髭神社再建のおり、木遣りが復活したことです。当時のことを「音頭3人、棟木要員12人の計15人で血の出るほどの練習をしました。歌を受け持ったので、田籾の先生の所に半年も通い、家でも毎日練習しました。七州城の竣工式にも木遣りを披露しましたが、できるだけ保存していきたいものです」と話してくれました。

◆「まちづくり活動」

6ヶ月間の愛知万博が閉幕して花づくり会場の跡地再利用が検討されました。

一部花作り施設を残し、当時の関係役員自から周辺竹やぶを切り開き、整地しコース作りをされ現在の保見マレットゴルフ場が誕生しました。そのおかげを持ちシニアにとって格好のスポーツの場となっており、誰でも気楽にプレーでき、人々が集うふれあいの場所となっております。各種大会が組まれ、日々たくさんの人々がプレーに熱中しています。

◆現在の課題

若者の地元離れ、少子・高齢化が大畑町でも例外ではなく、自治活動ひとつにしても美化活動など若者離れ、高齢化等、家の担い手がいなくなり他の組と共同歩調がとれず、組の再編を望む声が高まっています。また消防団勧誘活動にしても思うような結果が得られず悩みのタネとなっています。

大畑自治区データ
（H21.4現在）

設立：昭和４２年
世帯数：６１世帯
　　：６２世帯（昭和５４年）
組数：９組
面積：１．８４５Ｋ㎡
自治区たより：
回覧：月２回
ちびっ子広場：１箇所
防犯灯設置箇所：１６箇所
小学校：大畑小学校区
自治区会館：大畑町公民館